

## 飛行機の中で読むだけでフランス語会話ができるようになる本—イントロ（1）

塚田 泉

### 【困った！ 英語が通じない】

英語圏への旅行だったら、あまり英語ができなくても、まあ何とかなるだろうと思う人が多いですね。

でも、たまたまフランス語圏へ行くことになったらどうでしょう。それも、思ってもいなかった時に突然そういうことになったとしたら。

さあ困った、言葉の問題はどうしようなどと考えてしまう人も多いと思います。

最近フランスへ行っても、英語のできるフランス人が増えていますから、空港やホテル、ちょっとしたレストランやカフェなどで、まったく言葉が通じなくて困るといったようなことにはなりません。

ホテルに着いたら、ちょっと街なかに出て庶民の生活にじかに触れてこようという気持ちになりますが、パリのような大都市の、いわゆる観光ルートを歩くかぎり、フランス語を知らなくてもさほど苦にはなりません。

セーヌ川沿いに散歩してみようとか、シャンゼリゼのカフェやレストランへ行ってみようとか、オペラ通りで買い物をしようとか、旅行案内に書いてあるようなコースを歩くかぎり、そういう場所にはたいてい英語のできる店員がいますので、たいてい困ることもなく行動することが可能です。

しかし、もう少しフランスらしい所、パリらしい場所を見ようとして、中心街を外れた、あまり観光客の行かない所へ入っていきますと、とたんに英語では通じないことも多くなって、困ることもしばしばです。

もうかなり以前に見たテレビのコマーシャルですが、日本人の女の子がパリの街なかで道に迷ったあげく、「困ったれぶー」と独りグチる場面がありました。

これは、フランス語の「コマンタレヴー」（ご機嫌いかが、ハワーユー）をもじったものです。パリの街なかにおいても、「困ったれぶー」と言いたくなるような状況にならないとは言えないのです。

パリのリヨン駅の近くにある薬局で、日本人と思われる女性がさかんに英語で説明しているのですが、相手の薬剤師にはまったく通じません。

その女性はずいぶんヒステリーを起こして、傍にあった台の上に片足を乗せ、太股をパンパンと叩きながら、「パテックス、パテックス」と叫び始めました。まるで、女やくざが仁義を切って叫んでいるといった風情です。

それでも、薬剤師の女性には何のことか分かりません。「パテックス？」と言って首をひねっています。彼女は困り果てた顔をして、たまたま店内にいた私の方に視線を送り、肩をすくめて、助け

てくれという仕草をして見せました。

私は、フランス語で、それは筋肉を痛めた時に皮膚に貼る湿布薬のことだと説明してやりました。日本では、二十年近くも、或る女子大の非常勤講師としてフランス語を教えてきました。これくらいのことなら喋れます。

薬剤師はようやく注文の意味を理解し、フランス製と思われる湿布薬を奥から持ってきて、その日本人女性に手渡しました。

日本人女性は、よほど湿布薬を必要としていたのでしょう。しかし、話がうまく通じないので、最後にヒステリー状態になってしまったのがよほど恥ずかしかったにちがいありません。隣りにいた私の方へは一瞥もせず、「あら、分かっちゃったよ」と言い残して、店を出ていきました。

こういう日本人旅行者って意外に多いんです。日本人が傍にいても、あるいは道ですれ違っても無視するんですね。こんなところで日本人に出会ったら、せっかくの旅行気分が台無しだよ、といったところでしょうか。

しかし、フランス語ができないで旅行をする時には、たまたま傍にいた日本人が役に立つことがよくあります。同胞に出会ったら、軽く会釈しておくことも、快適な旅をするための知恵かもしれませんね。

フランス語ができないと差別を受けることもありますから注意する必要があります。ジュネーブだったかローザンヌだったかの税関へ行った時のことです。

そこにいたフランス人の役人はあまり英語が達者ではないらしく、そのせいか、英語しか喋れないアメリカ人の一行に対してはひどく突っけんどんな態度を取っていました。

ところが、フランス語が話せる人々の番になると、吊り上がっていた目が垂れ目になり、まるで別人のように愛想が良くなったのです。冗談交じりの会話をしながら、事務処理も手っ取り早くどんどんやってくれます。

英語圏の人々を差別をしていることは、誰の目にも明らかでした。実のところ、私は、自国語を喋るということが、これほど人間の気質に影響を及ぼすとは思ってもみなかったのです。自由に何でも話せるということは、気分まで解放してくれるのでしょうか。

こういうタイプのフランス人は、昔は沢山いたように思います。以前からフランス人の英語下手は有名で、みんなめったに喋りませんでしたし、英語のできる人でも、なぜか自分ができるということあまり他人に見せようとはしませんでした。

一方、英米人の旅行者も、以前は、自分がフランス語ができないということをむしろ恥じるような様子で、おずおずと、ごく控え目に母国語を話したものです。

ところが最近では、英米人の態度もずいぶん変わってきました。英語は世界中どこへ行っても通じる言葉なんだぞと言わんばかりに、カフェやレストランでも大声で話すようになりましたし、誰かれかまわず英語で話しかけてきます。ドイツ語を喋る人たちが小さくなっているのとは、対照的です。

これと並行して、フランス人の方にも、英語ができることを得意がる風潮が出てきたことは面白い現象です。特に、若者やギャルソンの中には、英語を話したがる者が多くて、こちらがいくらフランス語で答えても、執拗に英語で話そうとする者さえいます。

学生が多いムフタル街のカフェで、私が「英語はあまりよく分からないんだ」と断っても、どうしても英語で話しかけてくるギャルソンがいました。

このギャルソンが英語で喋り、私がフランス語で答えるという奇妙なやりとりが続いたのですが、テラスに坐って話を聴いていた学生たちが面白がって、「お前、いつからアメリカ人になったんだ」とギャルソンを冷やかす、大笑いをしたことがありました。

相手が日本人だと見ると、英語で話しかけてくる者もいます。日本人はアメリカナイズされていて、誰でも英語が喋れると思っているらしいのです。

フランスに着いて、真っ先にこういう英語好きの連中に出会うと、何だ、こんなことならフランス語など覚えなくてもよかったんだ、これでけっこう意志疎通ができるのではないかと安心してしまふ人もいるかも知れません。

しかし、事はそう簡単には行きません。英語ができそうな顔をしていても、いざ話をしてみると、あまり通じないといった者も多いのです。若者、特に学生たちのあいだでは、英語が話せるということが、ちょっとしたミエなんですね。

ところが、英語で話しているうちに言葉につまってしまい、途中からフランス語に戻ってしまう者もいます。私のほうが、ブローケン英語にせよ、まだマシだったということも時にはありました。

それに、昔からの伝統にはけっこう根強いものがあって、英語嫌いというか、フランス語に対するプライドを持ち続けている人たちも決して少なくはありません。何でこんな所で英語を使うんだという顔をされることもあります。

たとえば、カフェに入って行って、ギャルソンたちに英語で挨拶などしようものなら、なぜフランスに来てまで英語なんだ、フランス語の挨拶ぐらい知ってるだろう、といった顔つきをされることは請け合いです。

これは、英語で話しかけてくるようなギャルソンのいる店でもそうですから、妙なものです。お客にいきなり外国語で挨拶されることと、自分たちが外国語で応対することの間には、民族感情に触れるような、微妙な違いがあるようです。

英語で挨拶されると、外国から来たお客さんだという印象が最初から固まってしまう。ギャルソンたちが一步距離を置いた態度を取ることは確実で、いくら愛想良くお客に接していても、自分たちとは対話のきっかけもない他所者だというイメージは拭いきれません。

結局、この店では、通りいっぺんの待遇しか期待できないでしょう。

それを避け、フランス人の世界に一步踏み込んでいくためには、やはりフランス語を使う必要があります。フランス語圏へ来たからには、フランス語で話さなければ面白くありませんし、見えるものも見えなくなってしまいます。

そこで、まず、フランス語の三種の神器といえる言葉を覚えることにしましょう。

- ・ボンジュール（こんにちは）
- ・メルシ（ありがとう）
- ・シルヴープレ（どうぞ）

の三つの言葉です。

最初の二つの意味は知っている人も多いでしょう。三番目のシルヴープレは、人に何かを頼む時の言葉です。英語のプリーズにあたります。

この三種の神器を覚えていて、駆使することができれば、フランス語会話の半分は手に入れたと思っても、決して大げさではありません。

大げさでないばかりか、そう思い込むことが重要なのです。なぜ重要なのか、その意味をこれから明らかにしていくことにしましょう。

次は「フランス語会話の三種の神器」をぜひ読んでください。

飛行機の中で読むだけでフランス語会話ができるようになる本としてお勧めするのは、塚田泉著『へそ曲がりフランス語会話』ビワコ・エディション近刊です。